
竜殺しの剣

ポイ宇宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜殺しの剣

【Nコード】

N6757K

【作者名】

ポイ宇宙

【あらすじ】

ある小さな国の国宝展に訪れた旅人アルク。
国を救った国宝展の目玉竜殺しの剣を見るためにやってきた。国は国宝展でお祭り騒ぎ。運の悪いことにドラゴンが襲来。
どうするアルク。

（前書き）

えらく久しぶりの投稿です。

書いている最中何度か心が折れそうになりました。読みにくいかもしれないですが、読書後に感想いただけたら嬉しいです。

ある小さな国が、1年に1回の国宝展を行った。この国は、ある国宝のおかげで近隣の様々な国々に知られるようになった。その国宝とは、竜殺しの剣である。

およそ20年前、この国をドラゴンが襲った。ドラゴンに襲われた国は必ずと言っていいほど壊滅的な被害を受けていた。この小さな、軍隊も持たない国も先の国々と同じようになるはずだった。しかし、そうはならなかった。ある勇敢な旅人がたった一人で、たった一本の剣でドラゴンを退治したのだ。旅人は、ドラゴンを倒すと何も言わずに国民の礼を背中に受け国を後にした。そして、ドラゴンの死骸を撤去するときに頭頂部に刺さったままの剣が発見された。その剣は国宝に認定され、当時のままの状態で保存されている。

アルクと言う旅人が国宝展を見るために、国に訪れた。正確には、父の剣を見るためだった。

国宝展により国はお祭り騒ぎになっていた。アルクは国宝展が開かれる時間になるまで探訪することにした。遠方からやってきたサーカスや名物のドラゴン饅頭を堪能した。途中でアルクは一人の老人と出会った。

「お前さん見ない顔じゃが旅人さんかえ」

老人はドラゴン耳かきと言う物を露店で販売していた。

「そうですけど」

「どうじゃ、このドラゴン耳かきを買わないかえ。20年前にこの国で討伐されたドラゴンの骨をくすねて作った耳かきなんじゃ。硬度抜群でそんな簡単には折れんのじゃ」

と言って老人は耳かきを実際に使って見せた。

「うおおお。なんと見事に引っ搔かって気持ちいいのお」

耳かきを行っている老人は耳かきの快感に浸っていた。

「いや、耳かきはいらないます」

「なんと、お前さんは耳かきを馬鹿にしておるな。これなんかどうじゃ」

老人が出してきたのは１メートルほどの耳かきだった。

「これもすごいのじゃ。なんとドラゴン用。ドラゴンの耳を掃除するために作ったのじゃ」

「誰が買うんですか」

「それが問題なんじゃ。おかげで使うのはワシぐらいじゃ」

「えっ使っているんですか」

「おお。もったいないからの」

そう言つと老人は、耳かきの根元を持ち、耳掃除を始めた。

「こう使うんじゃ」

「ものすごい無駄な長さですね」

「言うでない」

老人が耳かきを抜くとカピカピの耳垢がへばりついていていた。

「どうじゃ、お前さん耳かき買わんか」

「・・・またあとで来ます」

老人にドン引きをしたアルクは、そう言つてその場を離れた。老人はまた耳かきを始めた。

時計を見るとすでに国宝展が始まっている時間になっていた。国宝展の行われている城にはすでに長蛇の列ができていた。その最後尾では、２時間待ちという看板を持っている兵士が立っていた。列の長さに呆れながらアルクは最後尾に並んだ。並んでいる最中に前の若者が話しかけてきた。

「お兄さんも竜殺しの剣が目的ですか」

「ええ」

「私はね、子どもの頃にこの国の竜殺しの伝記を読んで以来、剣を見たくて見たくて、ようやく夢が叶いますよ」

「それは、よかったですね」

少しアルクは誇らしくなった。父の記憶はほとんどなかったが、それでも父のことを誉められるのは嬉しかった。

2時間が経ちようやく入場することができた。展示されているものは他の国から見れば価値が低い物ばかりだった。もちろん、アルクを含め観客はみんなそんなものには目もくれず真っ直ぐ目的の竜殺しの剣に向かった。少しずつ列の歩くスピードが落ちてきた。どうやら、父の形見である竜殺しの剣がもうすぐのようだ。

アルクの父はアルクが2歳の頃に他界した。原因は、ドラゴンと戦った時に受けた傷が原因だった。ドラゴンは毒を持っていてそれにより父の体は蝕まれていった。おおよそ、ドラゴンを討伐して1年で父は死亡した。そのため、アルクは父の記憶がなかった。父に少しでも近づきたいと思い今回の国宝展にやってきた。

国宝展の目玉である竜殺しの剣の前は、ものすごい多くの人間が密集していた。人ごみをかき分け、背伸びをしてようやくアルクは父の形見を目にすることができた。剣は本当に当時の状態のまま保存されていた。刀身には竜の血がべつとりと付いていて、所々刃こぼれがしていた。それが当時のことを想像させる。写真だけで見た若かりし頃の父が目の前の剣を持ち闘っていた姿が。

「おい、立ち止まるなよ。さっさと行けよ」

後ろの声を聞き、アルクはしぶしぶ後ろ髪をひかれながら出口に向かった。もう少し、見ていたかった。少し残念だが、見ただけでもよしとしよう。アルクはそう納得し、展示場を後にした。

その時、突然辺りが暗くなった。不思議に思ったその場にいた皆が一斉に空を見上げた。なにか大きな物体が空に浮かんでおり太陽の光を遮っていた。

「ドッドラゴンだ」

見上げていた一人が叫んだ。ドラゴンは全長5メートルはあろう巨体だった。

「逃げる。食われるぞ」

叫んだ男は言うと同時にドラゴンから離れるために走り出した。男につられ周りの人々も走り出した。

「あれが、ドラゴン」

アルクは逃げようとせず、ドラゴンを注意深く観察した。見るからに堅そうな皮膚と鱗。触れると同時に肉が切れそうな爪。どんなものでも噛み砕きそうな牙。それらの武器と防具を装備した巨大なドラゴンが大きな翼を広げ国の上空を飛んでいる。そして、ゆつくりと着地態勢に入った。周りには命知らずの野次馬とドラゴンを倒して名声を得ようとする欲深い腕自慢達がいた。アルクは携えていた剣を抜いた。名声や栄誉を得ようとは思わなかった。ただ、父の死の原因になったドラゴンを倒したかっただけだった。

「ぐああああおおおん」

聞くものに恐怖を植え付ける咆哮をして、ドラゴンは地に降り立った。あまりの強大さに腕自慢達は怯んだ。その中アルクは一人剣を振りかざしドラゴンに向かった。

「うおおお」

近くの民家の窓を蹴りドラゴンの胸辺りまで跳躍をした。相手の体の大きさから斬るぐらいでは致命傷を与えることは不可能と考え、突きを繰り出した。渾身の力を込めた突きだったのだが、強固な皮膚に弾かれた。空中でバランスを崩したアルクをドラゴンは右手で振り払った。

「ぐわ」

攻撃を食らったアルクは国宝展の方に飛ばされた。アルクの渾身の斬り込みを見て怯んでいた腕自慢達が一斉にドラゴンにかかっていった。何とか、ドラゴンの攻撃を剣で受け大怪我を免れたアルクはすぐに起き上がった。しかし、攻撃を受けた代償かアルクの剣は折れていた。

「なんてことだ。これじゃ、戦えない」

剣を見てアルクは途方に暮れていた。

「そうだ。父さんの剣だ」

竜殺しの剣は、私を使えと言わんばかりのオーラを出していた。血まみれの形見を掴みアルクは、少しだけ涙を流した。

「父さん力を貸してくれ」

剣を力強く握りドラゴンに向かって走っていった。

何人もの戦士が次々とドラゴンにかかっては次々とやられていった。腕を吹き飛ばされた者、噛み砕かれ食べられた者。刃が通らない皮膚を持っているドラゴンほとんど無傷だった。

「もっもうだめだ。終わりだ、皆終わりなんだ」

腕を食いちぎられた男が諦めを口にし、死を覚悟した。ドラゴンは容赦なくその男に襲いかかった。しかし、ドラゴンの攻撃は男に届かなかった。ドラゴンの腕が切断され宙を舞っていた。大量の血液が噴水のようにドラゴンの腕から噴き出した。

「ぐおおおおお」

ドラゴンは苦痛の叫びをあげ自分の腕を切り離れた男を見た。そこには、竜殺しの剣を持ったアルクが立っていた。国宝を持ち竜の腕を切った男に、その場にいた戦士たちが目を奪われた。

「20年前の伝説の英雄の再来じゃ」

露店の中で腰をぬかし動くこともできなかった耳かき屋の老人が叫んだ。

「助かる。助かるぞ」

「父さんの剣。すごい切れ味だ。簡単にドラゴンを切ることができた。これならいける」

アルクは剣を再び構えドラゴンの頭に照準をつけた。

「これで、終わりだ」

怒り狂ったドラゴンは大きく口を開き、大きな炎を吐いた。足に力を入れ大きく跳躍をし、炎を避けアルクは民家の屋根に立った。

「今だ、やつちまえ」

下にいた男たちが叫んだ。その声を聞くと同時にアルクはドラゴンの頭上に飛んでいた。

「父さん仇をとるよ」

剣を振り上げ、ドラゴンの眉間に振り下ろした。金属同士がぶつかり合う音がした。そして、すぐに金属の壊れる音がした。おそらく、そこにいる全員が予想しなかっただろう。竜殺しの剣が粉々に砕けたのだ。

原因は国宝に認定したことだった。確かに竜殺しの剣は、素晴らしい切れ味を誇り、当時ならドラゴンの命を奪うことはたやすかった。しかし、国宝になってしまった竜殺しの剣は、当時の状態を残すためにドラゴンの血液が付いたまま保存されてしまった。そのおかげで、ドラゴンの血で剣はすっかり脆くなり、簡単に壊れるようになっていたのだ。おそらく、腕を切ったときに限界を迎えたのだろう。

「なっなにいいい」

その場にいた全員が叫んだ。

「ちょ、お前何してくれてんだ」

頭から血を流し座り込んでいる男が叫んだ。

「いいいや、えっだってえええ」

刀身が無くなり柄だけになった剣と男を交互に見た。

「いいいや、だって伝説の竜殺しの剣だよ。おれのせい」

「おまえのせいだ」

そんな問答をやっていると渾身の一撃から回復したドラゴンの頭がアルクの後ろにあった。

「おい後ろ後ろ」

「えっなんだって」

「だから、後ろだって」

「えっ後ろ」

少し昔のボケをしたアルクはゆっくりと後ろを振り返った。アル

クに額を割られたドラゴンが殺意を秘めた瞳で睨んでいた。

「あっ」

「ぐおおおおあああああ」

ドラゴンはアルクに向かって今までにない大きさの炎を吐いた。

「うわあああああ」

ギリギリにところでジャンプをし、炎をよけたが炎を吐きだすドラゴンの息により吹き飛ばされた。

「お前さん大丈夫か」

吹っ飛んだところは耳かき屋だった。

「なっなんとか」

言葉で平静をよそつたが、右足は完璧に折れていてもはや戦うことは難しかった。何とか起き上がろうとしたアルクにドラゴンは追いつ打ちをかけるように噛みかかった。

「うあ、やばい」

しかし、手元に剣はない、何か攻撃できるものがないか手探りで辺りを探した。手に、当たったものがあつた。それを見ると、ドラゴン専用の耳かきだった。

「なんでこれなんだよ」

しかし、文句を言っている場合ではなかった。老人の耳垢がべつとりと付いた１メートルの長さを誇る耳かきを振りかぶった。

ドラゴンの頭が目の前に来ていた。瞳にドラゴンの割れた頭が見えた。迷うことなくアルクは力いっぱい耳かきを握りしめ、傷口に突き刺した。

「うぎやあああああああ」

ドラゴンの爪を加工して作られた耳かきはドラゴンの頭蓋骨を貫き、脳へ達した。ドラゴンは、暴れ回り苦しんだ。辺りの家屋をいくつ破壊し、ドラゴンは息絶えた。

「はあああ、やった」

「やった！助かった」

周りで見ていた全員が一斉に歓声を上げた。抱き合う者、泣きだ

す者、色々な表現方法で全員が喜びを表した。

「わしの、わしの耳かきじゃ。わしの店の耳かきがドラゴンを倒したのじゃ」

耳かき屋の老人はドラゴンを倒したびれている英雄アルクを無視して、自分の商品の宣伝を大声で始めた。

「じ、じじい」

老人に呆れ、アルクは気を失った。

「調子はいかがですか」

病室で寝ているアルクに壮年の男性が声をかけた。

「いいですよ、足以外は。すいませんが、あなたは」

壮年の男性はアルクの右手を握った。

「本当にありがとうございます。私はこの国の王です。あなたにお礼を言いたくて参りました」

「どうも」

「実はあなたに、栄誉賞を贈りたいのですが、明日城に来ていただきたいのですが」

翌日、アルクは松葉杖をつき、城に来ていた。城は多くの人であふれかえっていた。英雄の姿を一目見ようと国中の国民が集まっていたのだ。

「皆さんこんにちわ。本日は喜ばしい報告があります」

昨日、病室にやってきた王が、声を張り上げた。

「こちらに、居られる方を皆さんはご存知ですか。我が国をドラゴンの脅威から救ってくださった英雄です。しかも、話を聞けば20年前に我が国を救ってくださった旅人の息子だということです」

一斉に、観客が湧き上がった。

「そして、この偉大な英雄アルクさんに国民栄誉賞を贈りたいと思います」

「ありがとうございます」

王から受け取ったトロフィーを掲げた。

「そして、もうひとつ表彰するものがあります」

「もうひとつ？」

「御覧ください」

王が手を鳴すと、豪勢に金や宝石で装飾された台座が出て来た。上に赤い布がかかっている。

「こちらの品を新たな国宝に認定したいと思います」

王は大衆に向かって力強く叫び赤い布を捲った。

「えっ」

それを見たアルクは絶句した。

「皆さんこちらのドラゴン専用の耳かきを国宝に認定したいと思います。こちらの耳かきは英雄アルクがドラゴンにとどめをさした物です。国宝に認定する価値有りとして、この場で認定式を行いたいと思います」

翌年、故郷に帰っていたアルクは再び国宝展に来ていた。国宝展は昨年同様に混雑していた。ひとごみに揉まれながらアルクは、今年初めて展示される国宝の前に来た。すっかり、周りにはアルクのことを忘れているようで、誰も見向きもしなくなっている。竜殺しの耳かきは、当時の状態のまま展示されていた。倒したドラゴンの血液をその身に纏い戦いを勝ち抜いた強者のオーラを発していた。しかし、先には耳かき屋の老人の固まった耳糞がしつかりと、こべりついている。

「国宝ねえ」

何故かアルクは悲しくなり、その場を後にした。

（後書き）

お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6757k/>

竜殺しの剣

2010年10月8日15時24分発行